

まなびまなばせ

魚乃眼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

洋ロリ、密室、家庭教師。何も起きないはずが……。。

目次

証言	1
ススミダス	6
GET UP AND DANCE	11
ワルノリデキマツテル	16

証言

僕はロリコンじゃない。

まず、これだけはハッキリと真実を伝えたい。

だからこそ、今自分が置かれている状況に対して特別感慨を覚えるということもないし、僕と”彼女”の関係性はビジネスライクなものであり、それ以上でもそれ以下でもないんだ。

「はーっ、信用できるかってのー」

自分から訊ねておいて僕の回答にまるで納得いってない様子の澤田は注文した海鮮ドリアを美味しくなさそうに食べながら言う。

久々に昼飯を食いに誘ったらこれだ。

「君に言われるのは心外だが、いったいぼくの話の何処が信じられないって言うんだ」

「全部だ全部」

ドリアに入っているエビをペツと吐き出しながら言葉を続ける澤田。

この男、エビも貝も食えないクセにエキスがうまいとかいう貧乏くさい理由だけで海鮮ドリアを注文して具を残すなんて冒涇を平気ですてくれる。僕が親なら二度と注文するなと説教しているところだぞ。

「小遣い稼ぎで始めた家庭教師のバイト先がヨーロッパ系ハーフのJC。コミックLOでしか見た事ねえ設定だ、ファンタジーだ」

「僕の生徒が純粋な日本人じゃあないのが問題なのか？」

「違え。そんなコテコテな状況を享受してるお前がロリコンじゃねーわけねーだろって話」

澤田はこちらの主張など聞く耳持たずといった様子。

彼に再び一から十までを語ったところで同じような反応で終わるのは想像に難くない。それは無駄、時間の浪費だ。

どうとでも思えばいいさ。僕は正真正銘、ロリコンじゃないのだから。

僕の名前は もちたてしんじ 持館慎二。

ごく普通の大学生をやっている。

大学へは実家から通っているため衣食住に困りはしないが、この歳だ。親からは当たり前のように自分の金は自分で稼げと言われお小遣いという名の不労所得を失った僕は何かしらのアルバイトをしようと考え、たまたま見つけた家庭教師の求人に応募したところトントン拍子で採用された。

バリバリ身体を動かす職よりは自分に会っていると思うし採用してもらってありがたいはありがたいが、全国展開しているグループの割に採用担当者が適当な感じに見えたのが少し不安だった。

その不安は現実の問題となって僕に襲い掛かる。

僕は数学と社会なら問題なく指導できると言ったのに、派遣先に決まった生徒は英語の重点的な克服を希望しているという。

高校時代のエピソードを聞かれ、自分を売り込もうとついオーストラリアでホームステイしたなんて話をしてしまったのが裏目に出ってしまった。英語のできるやつと判断されたらしい、

まあ、相手は中学生というのだからそこまでハードルは高くない。中坊相手であれば僕でも騙し騙しやっていけるだろうと自分へ言い聞かせ訪れた勤務初日。

同じ県内でも少し離ればてんで馴染みのない土地を、地図アプリを頼りに移動して辿り着いた一軒家。覚悟を決めてインターホンを押す。

「すみません、家庭教師サクシーズの持館ですが」

『お待ちしております。すぐ伺います』

インターホンの言葉通りすぐにドアが開けられ、生徒の母と思われる女性が僕を玄関に招き入れる。

いわゆる美魔女というやつか、そのの女性は三十代後半の既婚者とは思えぬ若々しきで、その美貌の割には髪の手入れを怠っているのか放棄しているのか、腰まで伸びたロングの髪がふわふわ散らかっているのが印象的だった。

そのままリビングに通され、軽く挨拶をする。こちらの自己紹介が済むと早速色々説明に入ろうかというところで、肝心の生徒がリビングに姿を現していない。

「それで、お子様はどちらに？」

「お恥ずかしい話なのですが、娘は先生に来てもらうことに猛反発しておりまして……部屋に呼びに行きますが、もしかしたら失礼な態度をとってしまうかもしれません」

生徒の母はややバツが悪そうに語った。

猛反発、と聞くとこちらも身構えてしまうがよくよく考えれば当然の話だ。家庭教師など雇わずに済めばそれに越したことはなく、それでも雇うということは子供の向上心が人一倍強いとその真逆かしかない。

娘を呼びに僕一人を残してリビングを後にする生徒の母。そんな彼女が娘を連れて戻ってきたのは出されたお茶のグラスが汗ばんできた頃だった。

「ほら、先生にご挨拶して」

母親にそう促された娘の彼女は人間観察力が特別高くない僕でもはっきり読み取れるほど「不服」の二文字が顔に浮かんでおり、その容姿が日本人離れしていることもあって僕の心から平静が失われるのは時間の問題である。

やがて彼女はぼそつと投げやりに。

「……オリヴィア」

と自分の名前を告げた。

こんな感じで、彼女に歓迎されていないというのは火を見るより明らかな状態であったが、こちらも仕事なので嫌だと泣き言は言えない。

まず始めに学力の現状を知るという名目で最初の授業にかかると母親に告げ、いかにも年頃の少女といった感じの部屋で生徒と二人きりになった僕は適切なコミュニケーションを図った。

「本来だったら直近のテストを見せてもらったり、用意してきたドリルを早速解いてもらおうところなんだけど、勉強つてのは嫌々やらせても効果が無いからね。少しお喋りしようか」

「お喋り……？」

学習机の椅子に座る少女は訝しむような眼でオウム返しする。

「自己紹介の延長だよ。ちょっと名前を言い合ったぐらいの仲のやつに偉そうにされるのは僕だって気に食わない。最初に僕が自分のことを話すから、次に君のことを聞かせてくれるかな」

とにかく最初はノーガード戦法、もしくは両腕を上げた降伏の姿勢で接しようと思った。

そんな作戦が功を奏したのか彼女の家から帰る頃にはある程度打ち解けることができ、彼女の表情も穏やかなものとなっていた。少なくとも敵対心は薄れたであろう。

帰宅した後は緊張が解けどつと疲れが押し寄せたが今まであまり感じなかった部類の達成感を得られ、長く続けてもらえるようにこちらも努力しようと思えた。

で、週二回のペースをどうにかこうにか切り抜け一ヶ月が経過した。

「ねえ、もつち先生は休みの日何してるんですか？」

休憩時間に生徒からの何気ない質問。

適当に答えてもいいが一応正直に答えておく。

「大学生は毎日が休みみたいなものさ。僕はなるべく平均的に講義を入れてるけどそれでも君たち中学生より早く家には帰れる。となると家でゲームしたり、遊びに行ったりかな」

まあ最近はおリヴィアちゃんの授業内容を考えたりと家庭教師としての仕込みに多く時間を取られているが、それは口にするだけ野暮というもの。

彼女の学力は当初僕が想定していたよりも遥か下のハードルであつたが、元が低い方が学力向上は実感しやすい。小テストの点数が10点上がっただけで大いに喜んでいたのは微笑ましかつた。

僕の話で大学生が大層暇な生き物に思えたのかおリヴィアちゃんは心底羨ましそうに。

「あーいいなあ。私ももつと遊びたい」

「はは。家庭教師の僕が言うのもなんだけど、勉強だけが全てではないからね」

「遊びに行くって、一人でですか？ それとも彼女と？」

「生憎と僕に彼女はいなくてね。街をぶらつく時は一人か友達と一緒にのどつちかさ」

「ふうくん……先生彼女いないんだ」

そののどつちが面白いのか、おリヴィアちゃんは妙にニヤニヤしていた。

物事におけるきつかけなどというものは、大概どうつてことのないことなのだろうが、まさしくこの会話がきつかけだったのだと後になって思い知ることになる。

少なくとも、この時点での僕はロリコンじゃなかった。

ススミダス

僕、持館慎二が女子中学生相手の家庭教師アルバイトを始めてから一ヶ月。

オリヴィアちゃんとは生徒と教師の関係であるが、学校のそれと違って歳もそこまで離れていないため授業は相当緩い。

もちろん完全にサボらないよう軽く注意したりするものの、年頃の少女が相手だ、お喋りはどうしても多くなる。

そして学生が相手となれば学校の事を話してもらおうのが一番やりやすい。友達のことだとか、休み時間の過ごし方だとか。

僕が家庭教師に行く時間帯は夕方よりも少し早めなので、練習が厳しめの運動部には入ってないだろうというのが僕の見立てだったが、オリヴィアちゃんが所属している部活はその名前を聞いてもピンと来ないものだった。

「遊び人研究会……?」

オリヴィアちゃんが転校してきたばかりの頃、色々とあつて結成された若干三名による学校非公式の同好会だとか。

しかし何をする同好会なのかはよく分からない。

「名前は気にしないで下さい。要するに遊ぶための部なので」

「僕の通ってた中学にゲーム部はあつたけど、そういうイメージ?」

「遊びなら何でもやってますよ。手押し相撲とかけん玉とか」

ゲームというよりはお遊戯といった感じらしい。

放課後に街でふらふらするよりはよっぽど健全か。

すると今度はオリヴィアちゃんの方から質問が。

「もっち先生は何かやってないんですか? 大学と言えばサークルじゃないですか」

「一応マジック研究のサークルに入ってるよ」

「ええっ!? マジック!?!」

途端に眼をキラキラさせるオリヴィアちゃん。

喰いつかれると分かってたから今日まで黙ってたんだけど、まあいいか。

「いったいどんなのやるんですか、人体切断とか!?!」

「僕はそういう大掛かりなやつは苦手で練習してないんだ。僕の専門はトランプさ」

「ちよつと見せてくれませんか……?」

「勿論いいけど、今日カード持ってきてきてないんだよね」

するとオリヴィアちゃんは机の引き出しを漁り始め、発見した物を僕に突きつける。

透明のプラスチックケースの中に見える赤と白の網目状の模様がプリントされたカードの束。

受け取って中身を確かめる。五十二枚のスイートとジョーカー二枚、枚数に問題は無い。

「これでやれませんか」

「配管工のおじさんで有名なところが出してるプラスチック製のやつか、まあマジック向きじゃないんだけど……オーケー、やってみよう」
デッキをカット、シャフル。

マジシャンぽさを演出するためにヒンズーではなく空中リフルでシャッフルをやると食いつきが良くなる。

交ぜ終えたデッキを裏のまま右手で持ってショーを開始。

「まずは超簡単なのから。カードを上から一枚めくるよ、クラブの3だね」

めくったカードを裏に戻す。

「そして今度は上から裏のまま引いて、袖をトントンとカードで叩く。

すると」

「すると……?」

「おまじないをかけられたカードはこの通り、ハートのエースに大変身」

「ええっ!?! なんで!?!」

オリヴィアちゃんは目を丸くしている。いい反応だ。

タネ明かしにもう一枚カードを引いて見せるとオリヴィアちゃん
はあつと声を漏らす。

「ダブルリフトって呼ばれる技術さ。最初にめくったカードが二枚重ねになってただけなんだ」

「……なんだか子供だましですね」

「中学生に通用すれば充分なんだけど、タネのシヨボさにつかりしてるみたいだし次は本格的なのをやろうか」

再びシャッフルをしてから裏向きのままデッキを扇状に広げる。

「この中から好きなカードを一枚引いて、僕に見せて」

「んー、これ」

「スペードのジャックだね。じゃあこの引いたカードを山札の真ん中に差し込んで、そう」

デッキを纏め、右手から左手にスプリングでパラパラとカードを移動させる。

これはただの演出。

「そしてパチン、と指を鳴らす。そして一番上のカードをめくると、スペードのジャックが上に移動する」

「嘘!?!」

もちろんフィンガースナップも演出。

その後もいくつかのパターンでアンビシャスカードを披露したが、オリヴィアちゃんは驚きを通り越して感心したようなりアクションに変化していった。

やろうと思えばいくらでも出来るが僕はマジック教室をしにここに来て居るわけではない。デスクをケースに仕舞って彼女に返却。

「そろそろ勉強に戻ろうか」

「……あのっ」

何か言いたげな様子のオリヴィアちゃん。

すると彼女は突然、床に腰を落とし、背中を丸め、頭を下げた。

「私を弟子にして下さいっ！」

ブロンド少女に似つかわしくない完璧な土下座姿である。

僕が土下座させたわけじゃないとはいえオリヴィアちゃんの母親が見たらパワハラか何かだと思われかねないため、とりあえず椅子に座ってもらい話を聞くことに。

「それで弟子って？ 自分で言うのもなんだけど、そんなに凄いマジックじゃなかったでしょ」

「マジックもそうですけど、もっち先生って色んなことを知ってるじゃないですか」

「5年ちよつとはオリヴィアちゃんより人生の先輩だからね」

「なので、もっち先生には遊びの師匠になってもらいたいです……！」

ふむ、なんとなく話が見えてきたぞ。

ビシッと人差し指を突きつけて魂胆を言い当てる。

「つまりオリヴィアちゃんは僕から教わった遊びで遊び人研究会の他に子にマウント取りたいんだ？」

「うえふえあつ?!? しょ、しょんなことナイデスヨ〜」

僕から視線を逸らし挙動不審に身体を震わせるオリヴィアちゃん。面白いくらい動揺しまくりだ。

それにしてもううむ、どう答えたものか。

「そんなの僕としてはどうでもいいけど、ここには仕事で来てるしね。授業に支障きたすほどフリータイムの時間は割けないよ」

「だ、だったら家庭教師じゃない日にやりませんか。土日とか!」

いやまあ確かに土日は都合つきやすいし無味乾燥なまま月曜を迎えるよりは何かしらやった方がQOLが上がるのだろうけど、やけにグイグイ来るなあ。

ここが一つの分水嶺になるであろうことはこの時点の僕でも薄々察していたが、最近じゃ妹のようにすら思えてきた少女の熱意を前に首を横に振ることなど僕にはできなかつた。

僕が承諾したことをわーいと喜ぶオリヴィアちゃん。こっちまで嬉しくなるような気がする。

しかし冷静に考えると、彼女の方からお願ひしてきた形なので何も問題はないものの、これが逆だったら完全に僕はやばいやつだ。

なんだよ休みの日に遊びを教えてあげるから弟子になれって、まさしく不審者の口上ではないか。

僕が澤田の言うようなロリコンだったら自分の身が危ないかもしれないとかオリヴィアちゃんは思わないだろうか。

などと考えながら授業再開のために講師用テキストを鞆から取り出している。

「あつ、そうだ。連絡しやすいようにLINE交換しましょう」

「……………え?」

「まさかもっち先生、大学生なのにLINEも入れてないんですか?」

「いや、やってるけど…………」

「じゃせっかくだから”ふるふる”で交換しましょう。一度やってみたかったんですよ」

ともかく、事実として僕のLINEの連絡先に女子中学生のそれが追加されたということは確かである。

底なし沼に落ちた時は下手にもがくなどベア・グリルスもよく言うが、僕自身何か妙な深みに沈んでいつてる気がするのは気のせいだろうか。

GET UP AND DANCE

僕の所属サークルであるマジック研究会は大学敷地内にある四階建てサークル棟の三階が拠点だ。

有り体に言ってしまうとただの弱小サークルである。

活動することには何かしらの強制力がある集まりというわけでもないし、メンバーの勧誘には一切力を入れていない。僕を含めても十人切ってしまうような低人数で構成されているのだから天文同好会より立場が下の、マジックとは名ばかりのお遊び連中。そう他の文系サークルからは見られている。

内情としては名ばかり研究会なんかじゃなく、メンバーのスキルは確かなものだけど協力してネタを考えるなんてことはなく、皆勝手に練習して勝手に披露する感じ。意地の悪い連中だ。

「つまり僕は君が期待するほど凄いやつじゃあないんだ」

僕という人物のシヨボさを語って聞かせている間、オリヴィアちゃんは何考えているかわからない小動物のように無言でじーつとこちらを見ていた。

土曜日の昼下がりに女の子とスタバでお茶してるなんて言う間、こえは良いが相手は5歳年下。兄妹か親戚にしか見えない構図だ。

暫く黙ってオリヴィアちゃんの様子を窺っていると、注文したバナラクリームフラペチーノを一口吸ってから。

「……だったら、なんで引き受けたんですか」

「ごもつとも」

オリヴィアちゃんは無理やりシャワーを浴びさせられた猫のような表情でうつむき、小声でぶつぶつ文句らしき言葉を吐いている。

僕としても一応、フォローを入れておく。

「一つ言いたいのは過度な期待をしないでくれってこと。僕がこうし

て来てるのは遊びから学べることだってあると君に知ってもらいた
めなんだ」

「どういう意味ですか?」

「そのうちわかるさ」

これ以上は禅問答になるのでそろそろ実習の時間にしよう。

テーブル下に置いたボディバッグからトランプデッキを一組出す。
するとオリヴィアちゃんの眼がエサを前に”待て”を命令された
犬のようなものへと変わる。

僕はトランプをケースから出してカットしながらオリヴィアちゃ
んに説明する。

「トランプに限らず、マジックには大きく分けて二種類ある。ひとつ
は技術ワザが必要なもの」

この前見せたカード二枚を重ねて一枚のようにめくるダブルリフ
トや任意のカードを一番上に持つてくるトップコントロールは実演
レベルになるまで少なからず練習が必要だ。

プロのステージマジックともなれば一つ一つの技法はもちろんの
こと、演者のトーク、身体の動き、視線の先まで入念に計算して行わ
れる。当然、リハーサルは必須。

「ただマジックで何かすればいいわけじゃあない、観客を欺くために
は現象以外の要素が大事になる。その一つがよく言われている”ミ
スディレクション”だね」

「ううん、難しくてよくわかりません」

「要は小難しい技術が大前提となるマジックさ。そしてふたつ目は技
術じゃなく才能が必要なもの、それも特別な才能がね」

カットしたデッキを裏のまま机に広げると僕は努めて真剣に言う。

「さっきは自分のことを凄いやつじゃあないとか言ってたけど、あれ
は本当のことを黙っておきたくてついた嘘なんだ」

「本当のことって?」

「実は僕、超能力者なんだ………つてベタすぎっ！」
オリヴィアちゃんは少し気の抜けた様子でコクリと頷く。

「いくら私がバカだからってそんなお芝居には騙されません。もし私が超能力者だったら家庭教師なんて面倒なことやらずに、楽にお金を儲けるのに力を使いますから」

「随分可愛げのないことを言うじゃあないか。けど、まあ、確かにその通り」

「本物の超能力者ならテレビに出た方が稼げますよネ〜？」

中々どうして気分よく煽ってくれる。

では女子中学生の鼻を明かしてやるとしよう。

「このカードの中から一枚選んで君にだけ見えるように絵柄を確認してくれ。カードの並び順を疑うなら自分でシャッフルしてもいい」

「当然、シャッフルさせてもらいます」

カードを束にしてシャッフルするオリヴィアちゃん。

完全にバラバラになったと思った頃、トランプは再びテーブル上に広げられ、オリヴィアちゃんは端から六番目のカードをピックアップしました。

ここで僕は再び胡散臭い台詞を吐く。

「僕の能力は、透視。本物の超能力者ならトランプ程度の紙切れ、裏面を覗くのはわけない。君が選んだカードはダイヤの5だ」

「……当たってます」

「もちろんすり替えじゃあない。君にシャッフルしてもらってから僕はカードに触ってない」

「本当に透視した……？ いやそんなわけあるはずが……」

腑に落ちないといった様子で選んだカードをテーブルに戻すオリヴィアちゃん。

このまま演技を続けても良かったが彼女にふたつ目のマジックをちゃんと説明するためタネをバラす。

僕はトランプの裏面にあるワンポイントを指差し。

「このトランプはマークドデックと呼ばれるもので、一枚一枚柄に細工がしてあって裏向きのままマークと番号の区別がつくようになっている。ほら、こうすれば分かりやすいかな」

カードを束にして裏面の左側をパラパラめくってオリヴィアちゃんに見せる。

マークドデックはそれと分かりにくいデザインのものもあるが、重ねたカードをめくった時にパラパラ漫画のように絵が変わって見えるようになっていいる。リフルシャッフルは禁物だ。

オリヴィアちゃんは少しふてくされた表情で。

「インチキじゃないですか」

「ズルいと思うかい？ アンフェアだったかもしれないけど、確かに君は騙されたんだ。恨みっこなし」

純粹無垢な少女に賢しさを説くのは気が引けるが、賢しいことが自分の身を守る時もある。

マジックの鉄則その1。それは相手を出し抜くこと。

「そしてさつき言ったふたつ目のマジックについて訂正するよ。それは技術も才能も要らない、誰でも出来るマジックのことさ」

「技術が要らない……」

「練習したトランプマジックより練習不要のコインマジックの方が往々にしてウケたりするからね」

と、まあこんな感じで掴みはバツチリだったと思う。

なんだかんだマークドデックに興味を持ったのか、オリヴィアちゃんが貸してほしいと言ったので快く渡した。

それから他のセットアップだけで行えるセルフワーキングのトランプマジックをいくつか教えた。

しかしいくら技術が要らないマジックとはいえ手順を覚える必要はあるわけで、オリヴィアちゃんは覚えるのを断念した様子で頭を抱

えてしまう。

「う、うーん。誰でもって言うてましたけど、私にはまだ無理そうです……」

「一つずつやっていけばいいよ」

覚える気があるなら、だけど。

っと、オリヴィアちゃんのバナラクリームフラペチーノが空になつてる。

「何か注文してこようか？」

すると彼女は結構です、と首を横に振ってから切り出した。

「せっかく街に来てるんですし、もっとお出かけしましょうよ」
お出かけ、とは。

ワルノリデキマツテル

女子中学生とわざわざオフである休日に会うことになり、マジック講義を行うはずが街ブラに切り替わる羽目に。

このようなパターンをミミリたりとも想定していなかったといえは嘘になるが、まさかというのが本音だ。

僕としては適当にあしらって終わり——という言葉が悪いけど——な腹積もりであっただけに、オリヴィアちゃんと行動を共にするとなると行き先が悩ましい。

何せ歳が五歳も離れている女の子。ジエネレーションギャップと
いうか、グツとくるツボがわからない。

流石にデパートのおもちゃコーナーや中古ゲームショップで騙せるような年齢じゃないってことはわかるが、僕にどうしろと。

向こうはリードしてもらって当然といったご様子で。

「それで、どこに行くんですか？」

と期待いつぱいの眼差しを向けてくる。困った。

僕は微妙な気持ちを表情に出さないよう努めてオリヴィアちゃんに訊き返す。

「どこか行きたいところはある？」

「やだなー、年上なんですから先生がリードしてください。私はどこでもオーケーなので」

リードってなんだ。デートじゃないんだから。

こんな調子で単なる課外授業のはずが勝手にハードルが上がると
いう無間地獄。

黙っていても事態は好転しないため、少しばかり考えてから行動を
開始。

大通りのスタバから駅まで引き返して高架下に入る。

そして階段を上がった先が目的地となる。

生活用品、日用品など圧倒的な品揃えを誇る店内を見渡し、オリヴィアちゃんは僕に問う。

「なんですか……?」

「百円均一ショップだよ。知らない?」

「知ってまーす」

オリヴィアちゃんはバカにされたと思ったのかとてもゲンナリした表情だ。

しかしそのような反応をされるのは想定している。

「もしかしてオリヴィアちゃん、百均ってイメージだけで粗悪品ばかりのショボい店だと思ってるんじゃない?」

「そりやそうですよ。あつ、もしかして私が日本の言葉わからないと思ってます? こういうのを安かろう悪かろうって言うんですよ」「ならその認識を覆してあげよう」

オリヴィアちゃんを連れ店の奥へ進んでいく。

陶器、インテリア、キッチン用品なども一見の価値はあるのだが、今回オリヴィアちゃんに見せたいのはこれである。

おもちゃ類やパーティーグッズが並ぶコーナーにある一面を前にして言う。

「これが百均の神髄さ」

その一面には百均オリジナルのマジックグッズがズラリと並べられており、まさしく圧巻の光景と言えよう。

下手なおもちゃ屋のマジックコーナーより凄いラインナップに思わず息を呑むオリヴィアちゃんだったが、すぐにハッと我を取り戻した表情になり。

「確かにいっぱいありますけど、しよせん百均の道具ですよね」

「そんなことないさ。例えばこのトランプなんかは百均の凄さがわか

りやすい」

「ええ？ 普通のトランプでは？」

陳列されていたトランプの箱を取ってオリヴィアちゃんに渡す。

彼女が言う通り、マジックグッズでさえないようなごく普通のトランプだ。

凄いののはトランプの品質である。

「実はそのトランプ、エンボス加工がされているんだ」

「ラスボス勝とう？」

わざとボケて言ってるようにしか見えないおとぼけ顔のオリヴィアちゃん。

突っ込みを入れたくもなるが、聞きなれない言葉なのは間違いないのでスルーする。

「エンボス加工だよ。オリヴィアちゃんが持つてるプラスチック製のトランプは静電気が原因でカードがくっつきやすいって弱点がある」
わかりやすい例としては小学生が休み時間によくやる下敷きで頭をこすると髪がくっついて浮くというやつだ。あれと同じ現象がプラスチックカードで起こる。

普通のトランプゲームをする分にはプラスチック製でも全く構わないが、カード一枚一枚を操るマジックにおいてカード同士がくっついて意図しないカードを操作してしまうなんてことあつてはならない。スピード以上に精密であることが大事だ。

そこでマジック用の紙製トランプにはエンボス加工というカードに凹凸ができる特殊加工がなされており、それによってカード同士のくっつきを防止しているわけだ。つまりエンボス加工は凄い。

とりあえず百均にしては本格的な代物だと理解したらしいオリヴィアちゃんは。

「じゃあ他の商品は何が凄いんですか」

「まあ、全部が全部凄いつてことはないんだけど、例えばこの予言マ

ジツクなんかもコスパがいいと思うよ」

一から六までの間で相手に任意の番号を選んでもらい、それに対応するマークのカードを予言するというマジック。

このマジックのいいところは完全フリーチョイス、演者が後出しで対応できるため相手に何番を選ばれても問題ない点にある。

客に腕の良いマジシャンと思わせるにはフェアだと信じ込ませるのが手っ取り早い。本当にフェアかどうかは重要じゃない。

「僕が中学生の頃はこういうの百均で売ってなかったからね。いい時代になったもんだ」

「先生まだ二十歳にもなってないでしょ。お爺さんみたいなこと言わないで下さいよ」

「いやあ、僕なんかオリヴィアちゃんからしたらおじさんでしょ」

「……………そんなことないですけど」

オリヴィアちゃんはどこかバツが悪そうに社交辞令を述べる。

それから彼女に他の百均マジック道具解説をしたが、購入したのは僕が最初に好評したエンボス加工トランプのみに留まった。

で、もちろんこれで終わりというわけにいかず、当然のように次はどこに行くのか訊いてくるオリヴィアちゃん。

こちらとしては女子中学生をあまりあちこち連れまわしたくもないため、行動範囲を絞ることに。

百均を出て、階段を降り、高架下を歩いていった先のゲームセンターに入店。

休日にも関わらず客足が多くないものの、筐体音で騒がしい店内は箱入り娘にとって物珍しい光景らしくオリヴィアちゃんはキョロキョロ視線を動かしていた。

「デパートのゲームコーナーとは全然雰囲気違うんですね」

「こっちはガチガチのゲームマー向けだから」

業界的に厳しいせいか、駅近くのゲームセンターはこの一店舗のみだ。一昔前は他に三店舗ぐらいあったのだけれど。

とはいえ少し歩けば全国展開されてるアミューズメント施設のビルがあり、ここと違って最新作をちゃんと入荷してくれるため格ゲーや音ゲーをやる層の多くはそっちへ行く。

ここを利用するのは暇つぶしがしたい客。平日は定年退職済であろう高齢のおじさん方が古臭い筐体で遊んでいるのが日常である。良くも悪くもステレオタイプなゲームセンターといった感じ。

僕は国民的人気キャラクターのぬいぐるみが並べられてるクレールゲームの筐体を指差し。

「なんか欲しいのあったら取ってあげるよ」

「あつ、それよりゲーセンならアレやりたいです！」

「アレって?」

「カーリング!」

笑顔で僕に向かってそう言うオリヴィアちゃん。

多分、というか間違いなくエアホッケーのことだろう。

新台入荷が乏しい店にせよ、ここは腐つてもゲームセンター。エアホッケー台ぐらい当たり前のように存在する。

といってもホテルのゲームコーナーに置いてあるような年季の入りで、手入れもおざなりなのか台のあちこちに細かい傷が入っている有様だ。

筐体に百円玉を二枚投入して早速ゲームを開始。ルールは6点先取。

「先攻は譲るよ」

「レディファーストなのはいいですけど、私は容赦シマセーン!!」

ファーストストライクで勢いよく円盤を弾き飛ばすオリヴィアちゃん。

直線的な軌道なので合わせるのは容易だったが、思いのほか球威があったためこちらが弾き返す前に甘いリターンとなってしまう。

「もらったア!」

オリヴィアちゃんは斜めに鋭いスマッシュを放ち、円盤は壁面を反射して僕のゴールに吸い込まれていった。

エアホッケーで遊ぶのなんて数年振りだから、なんて言い訳するつもりじゃないけど女子中学生をナメてたね。

こういう時、僕が映画に出てくる魔法使いのようなマジシャンだったらアクションシーンもばっちりこなせたのだろうけど、”運動”の二文字から遠のきつつある文科系大学生にはシューティングゲームに持ち込むのが精いっぱい。

結局、4―6でオリヴィアちゃんに敗北してしまった。

そこそこの疲労を覚えている僕に対し、オリヴィアちゃんは余力を感じさせる元気な笑顔で。

「やったあー！ 私の方が強い!!」
ちよっと悔しい。